

東京女子大学教育学研究室内の清水と申します。

立花研究室には今回が2回目で、昨年(08年)かなり長い時間を割いていただいて、私のプレゼンをお聞き頂いたという経緯があります。早速ですが、改めて簡単に自己紹介させていただきます。

祖父から強い影響を受けた

1975年、和歌山県に生まれ、父はサラリーマン、母は自営業という両親のもとに生まれました。そのような中あらためて自分のルーツに思いを馳せる際、いつも感じるのは私の人格にとっても強い影響を与えたのは祖父の存在だろうなあとということです。祖父はずっと長い間、県の同和教育推進委員会の会長というのをやっております、小さい頃自宅には教育長や現場の教師がよく出入りしていたことを覚えております。元は筋金入りの共産党員で、戦時中、反戦運動をして逮捕され、仮釈放中に逃亡し、終戦まで朝鮮半島に潜伏していた。終戦と同時に帰国して各地域の自治会活動を中心に行っていた人物だと聞いております。

こういう話は、祖父が他界してから詳しく知ったのですが、祖父が、もしかしたら私の人格を形成している重要な人物なのではと思っているのです。

私は91年に、県内の全寮制の高校に進学しました。94年に高校を卒業した後、明治学院の国際学部に進学しました。当時、国際学部は人間科学、ヒューマンサイエンスとともにとっても注目された学問領域で、中でも私は国際政治を専攻し、武者小路公秀教授の研究室で国際政治を学びました。その後、某私立高校の採用試験に合格し、98年4月から専任教員として6年間勤務しました。

2004年に進学のために退職、立教大学大学院に進学致しました。当時、特任教授をされていた伊勢崎賢治先生、現在は東京外語大学にいらっしゃいますけれども、その研究室に所属して平和構築学と高校の公民科教育プログラムの融合及びその実践研究を2年間行い、学位を取った後は、もともとは現場で教師でしたし、根っからの研究者ではありませんので、「研究を最終的に実際の現場に返さないと、机上の空論でしかないじゃないか」と強く感じていたことから、実家がある和歌山県の公立高校に戻り、一年間公民科・地理歴史科の講師をしました。

1年間講師として教育委員会より配属された高校の、教務担当の先生が非常に理解のある方で、「既存のプログラムをちゃんとやってくれば、その範囲内で君が研究したことを実践してもかまわない」という許可をいただいたので、現場で実際に生徒達と向き合いつつ、同時に大学院で研究した研究プログラムを実践して、その結果を得るといって研究しました。

そのような中、幸運にも東京女子大学の教育学研究室にて非常勤の講師をすることが決まり、あわせて2007年度4月から、町田市の教育委員会に専門職採用（嘱託職員）されることになったため、妻と共に上京し、現在に至ります。

さて、私と立花ゼミとの関係は、上記の出来事があった2007年度にさかのぼります。具体的には第2回21世紀社会デザイン研究学会において、平和構築分野で発表させていただく機会があり、その発表の場に立花先生が来てくださっていました。私の発表の中に、実践研究において生徒達にとってアンケートを紹介する場面があり、その生徒の言葉で「また平和教育か」という言葉があったのですが、たぶんそれが立花先生の心にひっかかったんじゃないかな、と思うのですけれども、このことがきっかけで、ついには先生のゼミに呼んでいただき、その後先生のゼミのプレゼンターとして昨年発表させていただいた上で本日に至るということです。

そもそも、私の研究の動機は1997年の夏に、一人の女子高生が「先生このポスター、何？」と私につきつけた質問がきっかけでした。それは、一枚のユニセフのポスターでした。

キャッチフレーズとして「子どもは戦争の道具じゃない」って書いてありまして、少年兵がカラシニコフという小銃を手に抱えたポスターでした。私、実は恥ずかしながら、そのポスターが持つ意味やその背景にある現実、そしてユニセフが訴えようとしている課題についてほとんど知りませんでした。私自身の反省も含めて話すのですが、現場の教師というのは得てしてこのような状況に立たされるとうまくごまかして、自分は知っているようなフリをしているんですけれども、私はなぜかこの時この現状を見逃せなかったんですね。

私の平和教育プログラムの中で、カラシニコフという銃をモチーフとして考えてもらうような授業案を生徒たちに提案しているのですが、ここで簡単にさわりを紹介しますと、このカラシニコフという銃は旧ソ連の兵器会社 Izhmash というところの設計責任者である、ロシア陸軍の技術中将だったミハイル・チモフェビッチ・カラシニコフという人が作った非常に有名な小銃です。

私がこの小銃についてプログラムで取り上げるほど詳しく深く考えるようになったのは、もちろんその生徒が持ってきたポスターのことというのがあったのですけれども、大学院の1年のときに International Action Network on Small Arms という上智大学で行われた国際会議がきっかけでした。

猪口邦子さんがまだ教授でいらっしやった時期で、上智大学の四谷キャンパスで2005年の5月7日から8日に渡って行われた国際会議です。そこで、当時朝日新聞の編集委員でルポライターをされていた松本仁一さんという方に出会いました。昨年、松本さんには直接出会うとお話したんですけども、この方が、「カラシニコフ」という本を書かれています。

今「1」と「2」の2冊出ていると思います。この中でお読みになられた方ってどれくらいいらっしやいますでしょうか？いらっしやらない。朝日新聞にも確か「カラシニコフ」というコラムを書かれていたと思うんですけども、これが2004年に発行されています。良い機会ですのでここで簡単に説明させていただきます。

この本のタイトル、11歳の少女兵の冒頭は本当に衝撃的なキャッチフレーズです。「私は3人殺しました」で始まっているんですね。11歳の少女兵というタイトルで、冒頭「私は3人殺しました」ですから、おそらく、11歳の少女兵が、3人を殺したってことになるんですが、11歳の少女がなぜ人を殺さなければならなかったのか？それが「カラシニコフ」という本が、全般的に語っている問題です。私が、高校生のプログラムとして提案したい平和教育の核になっているものはこのようなニュアンスです。

つまり、現在の戦争の実態、現実っていうものを日本の同世代の子どもたちが直視して考え議論する、というのが私の考える教育プログラムの柱であり、「そういう議論というのは、高校ではなく大学の専門機関に進学した後に、高等教育のプログラムとして実施・議論するものであって、初等中等教育ではそのような課題を議論するための知識の構築を行うことが重要ではないか」といわれるのが現状です。

私は果たしてそうなのか、と強く疑問に思っている。つまり感性が最も鋭い時期に、このような同世代以下、11歳の少女兵ですからね。11歳の少女兵が抱えている実態というものを感情移入して考える、議論するというのがとても重要なのではないかと考えております。

司会 議論好きの方々が集まってきていますので、今のお話を受けてちょっと議論の時間をいただけたら、と思います。まず私からお伺いしたいのは1997年に、その体験があったということですけども、その少女の体験は、その前に先生が受けた平和教育と時代が違いますよね？その違いについて何か感じたこと、もしくはそれを現場にどう生かさなきゃいけないな、と感じたこと気づいたこととかを教えてください。

清水先生 まさに的確な質問かと思うんですけども、私の研究の原点って、そこだと思

うんですね。私が高校の時に実体験として高校の教育プログラムで受けた平和教育という視点と、今私が必要だと思っている平和教育の視点っていうものが...もちろんその経験が今の考え方の前提とはなっているんですけども、私が受けた平和教育ではなかったものが今必要になっている。つまり時代の変遷というものがそこに存在すると思います。今から話そうと思っていたのですが、私は75年に生まれていますから、高校に入った当時調度米ソを中心とした冷戦が終結するころだったんです。つまり時代の変遷とは、この89年の冷戦終結がひとつの大きな起点になっているのではないかと思います。

もう少し具体的に説明すると、それまでは大国対大国の紛争が警戒されて、それに核戦争という発想が絡み第三次世界大戦は核によって行われる...そういう視点から、ヒロシマ、ナガサキというもののメッセージを継承していかなければならないというのが、私が受けた高校の時の平和教育の中心だったと思います。ただ89年以降、ソ連が崩壊した後の世界の戦争の75%が内戦になってしまった。大きな破壊兵器を使った戦争というよりはスモールアームズ、さっき言ったカラシニコフを中心にした小銃、ナタやナイフなどで紛争が起こる。実態がかなり変わってしまったんです。

このような中でも、私が所属していた高校を含めおそらく多くの現場では、現在もずっとナガサキ、ヒロシマのメッセージを継承し続けているとは思いますが、そのことはもちろん引き続き行う必要はあるとして、現在の国際紛争で起こっている新しい様々な問題や課題をあつかっているかということ...。昨年、現場の元同僚と話したときはまだ、そういうものは未だほとんど中心となっていなくて、繰り返しますがナガサキ、ヒロシマ、沖縄のメッセージのみが脈々と受け継がれている状況だよと報告を受けています。

司会 戦争を否定することで平和が生まれるという消極的な平和の議論があると思うんですけども、積極的に平和ってものを考えるときに、それは逆に平和ファシズムみたいになっちゃう。そういう恐れがあるからこそ、平和というのが追求できないんじゃないかなーという考えを持っています。つまり大戦を否定することで今までは平和とは何かを教えていたわけですね。大戦がなくなった。なので、今度紛争とは何か。紛争についてどう考えるのかって教育をしなきゃいけない。

そのキータームとして先生のお考えでは「カラシニコフ・ナイフ・武器」そういうものを伝えようというようになったのかと感じたんですけども。紛争を教えるってことが果たして平和教育なのか？というのがちょっと疑問です。逆に平和って何？ってのを追求する方向になぜ行かないのか。

現場主義を貫きたい

清水先生 その議論は、今かなり注目されてる足達力也さんという方が本に書かれています。コスタリカの平和教育の話为例に出して、今おっしゃったような視点、つまり戦争と平和というのは別のものであって、平和を考える時には、戦争の対極にある平和というふうに考えずに、平和の重要性というものを「平和ってこんなにすごいんだよ、いいんだよ」と一方的に学ぶ。戦争と表裏一体となっていないものとして独立して平和を学ぶ。それが重要なんじゃないか、っていう視点があるんです。

ただ私はそうは思っていないのです。なぜかというと、私は現場主義というものを貫きたいと思っていて、現在、実際に平和でない状態にある国は、後で説明も致しますけれども、世界にはたくさんあるわけです。特にアフリカなどは、10数カ所が紛争状態にあると言われてますし、皆さんもご存知のところでは、アフガニスタンやイラクは戦争状態にあります。

そこにいる現場の人たちにとっての平和って何なのか？って考えたとき、それは単純に戦争がない状態。紛争がない状態なのではないかと思えます。これは否定できないものじゃないだろうか、と。もちろん、私たちみたいな紛争状態にないところの人間が平和を考えたときに、平和のすばらしさ、平和ってものはこういうものを与えてもらえるんだと議論するのはいいと思うんですけども、やっぱり私は現実には起こっている紛争に生徒たちが目を向けてそこに感情移入して、それを具体的にどういうふうに理解していけばいいのか…。

コンフリクト・レゾリューションつまり紛争解決の手腕について考え、議論することで解決していける可能性があるんだということを、高校の教育プログラムで、実際の現実の戦争をモチーフにして学ぶことの重要性を強く感じているのです。つまり、私の考えとしては戦争と平和というのはやっぱり表裏一体のものであって、切り離して考えることができないと思っています。

司会 というと平和教育っていう概念が変わってきてしまう気がするんですね。今までの。紛争をどう解決するか、というと国際関係論みたいなところも入ってしまいますよね。

あともうひとつ。紛争後どうするの？っていう視点も私は加えた方がいいんじゃないかなと思ってしまう。そうすると開発教育も入ってきてしまう。そのところの平和教育の考え方、紛争教育との区別とか、それとも教育法でこうした方がいいとか、ご自身の経験からのお話がありますでしょうか？

清水先生 私は個人的には教育と紛争を考えることが矛盾するものであるとは思っていません。つまり紛争解決というのは、簡単にテクニカルな面で捉えがちなんですけれども、技術やテクニックだけじゃないものが多いですね。これは私の恩師である伊勢崎先生に師事した中で学んだのですが、例えば、話し合いをするときに相手の気持ちをどう考えるのかと言う視点は、みなさんが想像している以上に重要なのです。

それは、人間の安全保障を考えるという大きな視点に繋がっていくと思うんですけれども、私はむしろ題材を扱うということよりも、何らかの具体的な結論を出すということよりも、何より題材をもとに生徒たちが自分の視点で、人としてどのように国際紛争の現実と向き合うかを議論し合うということが必要だと思うのです。こういう問題は、現在の専門家ですら解決できていない問題だから白黒はっきりさせる必要はないんですね。

平和というのはとても大変なんだ

つまり平和というのはすばらしいんだということも学んでもらうんじゃなくて、平和というのはとても大変なんだ、と。平和を作り出すというのは、こんなにも苦しく大変な作業なんだということを議論を通して知ってもらわなきゃいけない。そのためには、教授する側される側という形で、つまり教師という立場の人間が生徒たちに一方的に教授するというこのスタイルではもう成り立たないと私は思っています。

先生という立場にいる人間はアドバイザーとして何か題材を提案する。そのために世界の時事問題や現在の紛争の問題からピックアップできる課題をしっかりと調べて資料として生徒たちに提案する。それをもとに生徒たちが議論して発表する。もちろんそれは無理だとかそういうことは不可能だとか、できるとか、いろんな意見が出てもいいと思うんですけれども。つまり、善悪二元論的な答えをつけなきゃいけない、結果を出さなくてはいけない、白黒はっきりさせなきゃならないというのではなくて、議論するということから、平和を学び始めていかなければならない、ということなのです。

はっきり言って今まではどちらかというと継承ですから。何かを聞いて、それを自分の中に受け入れて理解するという構造が、平和教育の現場ではありがちだったと思うんです。もちろんそれが全て悪いわけではないし、続けていかなければならない部分もあります。戦争の実体験者というのはどんどん減っていますし、そこから聞いて学ばなくてはいけないことはたくさんあるんです。けれども、学ぶ動機付けという点においては、まずは実体験 自分が現代の紛争について考えたり議論するところから順に積み上げて、じゃあ、過去の戦争っていったい何だったんだろう？と。

つまり現代から過去へ、っていう視点がいいのではないかと。つまり生徒たちの中に平和教育を学んでみたい！という動機付けを重要視したい。そのためには大きくは平和教育ですが、プログラムとしては平和教育という名前にしたいとは思わない。いかにも看板で「これは平和教育です」というのは提案しようとは思ってないんです。自分から学んでみたいと思わせるような仕掛けをプログラムの中に組み込みたい。それが私の専門の教科教育法という部分とリンクしてきます。

司会 その点について、ゼミのO氏から出ているんですが、公民科1単位では難しいのではないかと。社会科と公民科というところで扱うには非常に広すぎて、道徳とかも入って来るじゃないかと考えちゃうんですけれども、そこは、公民科でくくりますか？

清水先生 みなさん公民科ってどのくらいの方が受けられていますか？実は全員手が挙がらないとまずいんですけれども。どうでしょう？公民科という科目は必修で受けなきゃいけないことになってるんです。もちろん、現代社会、政治経済、倫理どれでもいいんですけれども必修です。特にその中で近年、現代社会というのはどの高校でも必修というふうになっているところが多いです。1年生でやるところもあれば、3年生でやるところもあります。

その内容は、思い返していただければいいのですが、現代社会ってとても範囲が広いのです。扱っている問題にいたっては、政治・経済・文化ともものすごく幅広い分野で。そこで果たして今どういう授業が展開されてるかといいますとさっき、ちょっと私が簡単に言いましたが、基本は受験対策としての丸暗記でしょう。

例えば政治でしたら、今の選挙制度の実態を形成している内容の語句項目を暗記する学習です。時事問題についてもトピック的に議論することはあっても年間を通して、次々と提出される時事問題・課題を、みんなで議論し、発表し合うような授業は展開されておらず、やはり語句暗記などが中心であることは否めないはずで。

もちろん、これが全て日本の現実ではなく、マンパワーで意識が高い先生が個々で工夫をしてらっしゃるケースはあると思うんですけれども、私自身教育実習生を大学から送り出していますと、事後報告で聞くとところによると中心は受験対策、高校3年生の授業だと指導教官より具体的に厳しく「受験対策にしてくれ」と指導されるようです。例えば、私が学習指導案にグループ学習を入れて、議論させるような案を作らせ、実習の現場に持っていかせると「何だこの薄っぺらい指導案は。こんなじゃダメだ。グループ学習なんていらない」といわれて、すごく落ち込んで帰ってくるというようなことが現実にあります。「先生、こんなこと言われましたよ。先生の指導はウソじゃないですか」と言われるんです。

けれども、私は、それは現場の状況であって、私が伝えたい、指導したい公民科教育というのは受験教育に沿うようなプログラムのみではなく、そグループで議論したり考えたりして、公民科が扱う課題に対して学ぶ動機付けをしてもらうことにあるんだよ、って話しているんですが、はっきりいって辛いです。純粋に頑張っている学生は、私の指導と現場での指導に板ばさみになってしまって。正直優秀で純粋に学ぶ学生に対して私自身は申し訳ないと感じたりしてしまって、複雑な気持ちになります。

皆さん公民科ってどのように理解されていますか。これはですね、公民科担当の教諭だと絶対理解しているはずなんですが、公民というのはシチズン、つまり政治に参加する人々のことから始まっています。政治への参加の意味合いから市民と言いかえられることが多いのですが、公民科となると、実際に文部科学省の高等学校学習指導要領の第二章の第三節にこのようにうたわれています。

科目内容としては第一現代社会、倫理、政治経済。公民科に対する科目の定義というのが大事で、ここで文部科学省がこう言ってるんです、「現代の社会について主体的に考察させ」、ここが大事です。「主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに人間としての在り方、生き方についての自覚を育て、民主的平和的な国家社会の優位な形成者としての必要な公民としての資質を養う」と、こうはっきり言っているわけです。つまりわかりやすく表現すると、生徒にしっかり議論させろ、ということなんです。けれども果たして議論を中心に、現場において公民科授業が展開されてたかということ、先ほども触れましたが多くはそのように実践されてこなかったんじゃないかと私は思うんです。

質問者

先生、頭を整理するために、私なんかはそもそも公民という言葉にほとんどなじみがない世代なんですけれども社会科、公民科って括り方がされていますよね。公民科というものはその中に地歴だ、政経だ、っていろいろあるんでしょうか？

清水先生 公民科は今話した内容でして、それとは別に地理・歴史科というものがあります。

質問者 社会もまた違うんですか？

清水先生 社会科というものは細かく言うと高校にはありません。社会科は中学にしかないと言えます。というわけでこだわって表現すれば「私は中学校の社会科の先生です」というのは合っているんですが、「私は高校の社会科の先生です」というのは正確ではない

ですね。

つまり、高校は教科が専門的に分かれておりまして、公民科、若しくは地理歴史科というように分かれています。私はどちらも教える資格を持っていますけれど、もちろん片方だけの先生もいらっしゃいます。そういう形で分けられてますから、地理歴史科と公民科は、全く別個の科目になっています。ただ、中学校は社会科として展開されています。もちろん小学校もそうですね。

質問者 小学校は1、2年生は生活科になってますね。

清水先生 ああ、そうですね。生活科になりました。

質問者 そうすると政治経済と倫理が公民科に入るわけですね？

清水先生 そうですね、そういう風に理解していただければ、と思います。何度も繰り返しますが、地理歴史は公民科とは別個になっています。これは悲しい現実なのですが地学とか地理というのは、現在高校でやっているところが少ないのではないのでしょうか。ちなみに私の前任校はちょっと前に希望者がなく実施されなくなっています。私は政治経済も含めて公民科全般で（自分の提案する平和教育を）扱いたいと思っているんですね。

質問者 私なんかは、歴史の分野はいらないのか？と思っちゃうんですが。

清水先生 もちろん、そういう議論はあります。ただ、話が拡大しちゃうので、今は置いておいて（笑）

質問者 ちなみに何年くらい前からこんな枠組みになってますか？20年くらい前から？

清水先生 けっこう長い歴史だと思います。私が教員免許状を取った時点で、こういう風に分かれてましたので、すみません、はっきりとしたところはお伝えできないんですけども・・・

質問者 96年くらいだと思います。

清水先生 そうですね、20年くらいは確実に経っていると思います。

質問者 民主主義の教育にもなってくると思うんですけども、市民性教育っていうのも共通してくると、議論して、自分の立場を明確にしましょう、ってところが明確に出てくる。日本の丸暗記教育は、例えば人間の安全保障でも否定されていたりしますよね。逆にそういう議論を、さっき不可能とかできるってお話がある、意見がある、とおっしゃってましたけれども、どういう人がどんな観点で「そんなんでできないよ」って言っているんでしょうか？

日本では、学習の動機付けは試験

清水先生 現実問題で一番重要なポイントだと思うんですけども、例えば、実際現場に目を落としたときに、一番最初に、現代の高校生が勉強するときのモチベーション、つまり動機というのは何なのか、ということを考えてみると整理がつくと思います。実際に生徒に行ったアンケートに基づくんですけども、大体ですね80%くらいは「試験があるから」といいます。試験が勉強のずばりモチベーションとなります。もっとわかりやすく表現するならば学習のモチベーション、動機付けは試験。それに対し、今日後ほど紹介しようと思っていたんですけども、突然フィンランドが出てきて申し訳ないのですが、フィンランドの教育では、学習の動機付けは「自分が学びたいという意欲」です。

つまり、学びたくないものは学ばなくていい、という姿勢ですから、フィンランドの場合は。学びたいものに関しては、つまり学んでいるものに関しての動機付けは、必ず主体的に自分なんです。ここが大きな違いだと思ってまして、つまり、それは教育現場の問題というより、教育制度にあるんじゃないかなと思っています。話を戻して、極めて私はこの、試験のために学ぶというのは動機付けとして弱いと思っていますね。

質問者 フィンランドのお話に入っていたきたいんですが。

清水先生 何でフィンランドが出てくるのか、って話ですが、去年こちらで、私がお話させていただいた時はまだフィンランドというキーワードは出てきてなかったんですね。私が提案したい平和教育プログラムというものを実践するために、何が必要か、と模索していたときに出てきたのがフィンランドでした。

みなさん、PISAって試験、ご存知でしょうか？正確には、OECDが実施している、学習到達度試験なんですね、世界の。この試験で、読解力総合カリテラシーという面でフィンランドは、2000年くらいからずっと1位を死守してきていました。じゃ、日本はといい

ますと、2006年ですね、今から3年前のPISAで言いますと、日本は読解力では15位です。

ただ、06年に1位が韓国に入れ替わってしまったんですね。それまでずっとフィンランドが1位だったんですけれども、韓国がフィンランドにかわって1位になった。皆さんご存知のように、韓国というのは受験教育・暗記教育を日本以上にガンガンやっている国なんです。それが、1位になっちゃった。今までの受験教育は否定できないんじゃないかというような議論がちょっと出たんですけれども、実はこれには別の実態がありまして。

総合カリテラシー...つまり初めて見たような知識の応用力を問われる問題に対してですね、自分なりのいろんなリソースを使って「こう解けるんじゃないか」と向かっていくのが総合カリテラシーなんです。けれども、この応用問題も韓国はいっぱいやっていて、応用力問題ですらやったことがある問題になっていた。つまり類似した問題を経験・暗記していた。だから1位にいったという実態があるようです。ただ、これは果たして本当の意味でPISAが意図とする総合力で1位になったかというところは正直ちょっと疑問がありますね。

質問者 それは、国を挙げて受験対策をやった結果ということでしょうか？

清水先生 たぶんですね、日本でもB問題というのが出てきたんですけれども、今までの記憶だけの問題、暗記だけの問題じゃダメだということが日本でも話題になりまして、応用問題をさせようということで、文部科学省がB問題というものを提案し作ったんですね。今までのA問題という暗記力を中心とした問題とは別に。

そのB問題論が韓国でも議論されて、韓国はそういうものも全部ひっくるめて応用問題ですら全部覚えちゃった。繰り返しになります。問題を覚えちゃえば、それはもう記憶の中にありますから、本当の意味で自分で応用力を活かし試行錯誤して出した答えではなく、既にもう1回解いたことがある問題になっているわけで、1位になったという現実があります。確認ですが、この時2位はもちろんフィンランドです。

質問者 それは2006年をめぐって焦点を絞って何年かをかけて、取組んだ結果そういう成果をあげたということでしょうか。

清水先生 たぶんそうだと思います。長期的な取り組みだと思いますが、私、正直韓国の教育システムとか教育指針にあまり詳しくないので分からないのですが、そういうことだと聞いています。で、日本はですね、第15位と話しましたが、かなり低いですね。

10位にも入っていない状況です。2000年のPISAの読解力からしてもどんどん落ちていきます。たぶん10位以内には入っていたと思うんですけども。

質問者 下がり始めたときって、ゆとり教育とか関係ありますか？

清水先生 それがちょっと私としてもゆとり教育が行われたから下がったと簡単に理由付けられれば、分かりやすいとは思いますが、どうもそうではない感じですね。つまり右肩下がりなのはズーっとあって、勢いが徐々に落ちてきていることなので、ゆとり教育を導入したから落ちたという風には簡単には言えないんじゃないかと思います。

質問者 もとものの丸暗記教育法からいけなかったとか、難しいものがあつた、と。

清水先生 つまりそれは、PISAの問題を見ていただければ分かるのですが、暗記でできる問題じゃないんですよ。例えば、南極大陸の地図がポンッと提出されていて、縮尺が横についている。で、あなたはこの地図一枚で南極大陸の面積をどのように求めますか？っていうような問題。これを理論付けて説明しなさいという問題なんです。それはもはや暗記では絶対に解けない問題なんです。だから、ゆとり教育が暗記にアンチテーゼを投げかけて、暗記が重視されなくなったから、PISAが解けなくなったとかそういう単純なことではないと思います。

質問者

先生はPISAの試験がよく解けることがいいことだという認識に立ってお話されていらっしゃるようなんですが、それが社会に入って役に立つということですかね？

清水先生 たぶんそこもすごく重要な議論だと思います。例えば、OECDがやってる試験なんですけれども、これが解けたから人間として教育がうまくいってるかは分からないと思うんです。ただ、はっきり言えることとしては、これで結果を出しているフィンランドという国は、とてもクリエイティブな分野で成果を挙げていると。日本はその面でかなり先進国であったんですけども、例えばみなさんもよくご存知のノキア等はフィンランドの会社ですよ。

実際にユーロ圏でフィンランドの技術者、つまりフィンランド人が組織のリソースとしてかなり重要なポジションに多く位置しているとも聞いています。もっと私の分野に近づけて言うと、平和構築という分野においても、フィンランドはかなりの成果を挙げているんですね。そう考えると、PISAの読解力というもので成果を挙げることが、今のグローバル

社会の中で多くの面でプラスに評価されているというふうに考えても間違いじゃないとは考えられると思います。

質問者 ちょっと目標があいまいなような感じがするんですが。その目標にするんだったら例えば価値とか知識とか教育の目標とか、どういう論理に重点を置いて、目的があって評価があって、それで何を目指しますか、っていう、先生の平和教育につながる、共通するところもあると思うのですが、どういうことを重視されているんですか？

フィンランドには定期試験がない

清水先生 誤解されたら困るなあ、と思ったんですが、私は別に PISA の試験でいい点を取ることが目標だとは思ってないんですね。これはひとつの資料として提供しただけで、私は PISA の試験で、いい点を出しているフィンランドの教育の中身って何だろう？どんなことをしているのか、つまり教育法という分に注目しなきゃいけないと思ったのですね。みなさんに話すときすごくびっくりされるんですけども、フィンランドにはまず日本でいう定期試験というものがありません。で、日本のような 5 段階や 10 段階評価もありません。要するに、いわゆる通知表ってものがないのです。

あとそうですね、例えば日本は小学校 1 年生でこれぐらいまでの学力、2 年生でこれぐらいまでの学力、3 年生でこれぐらいまでの学力、具体的に例を挙げると 3 年生で九九を覚えなきゃいけないというものがあったりしますけれども、そういうノルマは一切ありません。もうちょっと大きな幅で、7 年くらいでここまでくればいいよ、というようなスタンスです。このことを表している一番わかりやすい例は、知的欲求として学習能力が高い生徒、つまり動機付けができていない生徒に対してはいくらでも制限なく勉強させます。生徒をサポートする教師はといいますと、ほとんどが大学院を出ているんですけども、できる生徒にはあまりべったりと付かない。

例えば、できる生徒が相談にくると、あそこに参考書があるから自分で調べてやっつけよ、というように指導するというのです。じゃあ、教師は何をしているかというと、何で学ぶかわからないとか、理解できていない、すなわち動機付けができていない生徒にしっかりと付くんですね。更にわかりやすく言うと留年があります。ただ、留年を決めるのは、ほとんど自己評価です。つまり、さっき成績がないって言いましたけれども、ほんとに成績がないのか？というのと、一応成績らしきものはあるんです。

けれども、基本的には自分がどれだけ理解しているか自分で評価していて、そこで自分が「ここまで分かっているよ」という意思表示をしてしまうと、もう先生は助けてくれな

いので、分からなかったら分からないと正直に言うわけです。つまり、自分の評価って、自慢げに高く絶対に付けないわけです。日本でもし自己評価を実施すると、試験とか受験教育がありますから、いい点数取りたいので自分としては3の力しかないのに、4とか5を付けてしまうというようなことが起きるかもしれないんですね。でもフィンランドではそれが起きないシステムなんです。

質問者 確認したいんですけども、日本は6・3・3制です。どういうシステムなんでしょうか？

清水先生 詳しく言ってしまうと、それで時間をとってしまうと思うんですが。

質問者 じゃあ、ちょっといいのでしょうか？日本と比較するのがわかりやすいと思うんですよ。6・3・3制とかそういう制度という形ではなくって、例えば私が気になったのは、フィンランドって（教育費が）タダじゃないですか？そういう制度の違いはどのような？っていうのと。さっきから、生徒のやりたいほうに行くんだよ、って言いましたけれども、日本では生徒が試験を動機付けにしています。どうやって生徒が勉強したいと思うか？そのところは教授法でまかなえるものなのか？

清水先生 そこが結論になってくると思うんですけども、私は別にフィンランドのシステムを日本に導入できるかどうか、したほうがいいと単純に思っているわけじゃなくて、おっしゃったとおり、向こうは高社会福祉国です。高福祉高負担です。そういうことと比べると、日本は今、新自由主義の流れを汲んで、低福祉低負担というふうに変化しています。今の高福祉高負担のフィンランドの実践をそのまま100%導入はムリだと思う。

それをどういうふうに入力したいか？実際に、教授法としてどこまでいいとこどりが可能かどうかとところをずっと考え続けてきたんです。その中で、折衷案かもしれないんですが、現代の公民科の必修単位の中から1単位だけもらってその1単位を、いろんな時事問題をトピックとして議論し、グループ討議するような授業を实践するという枠組みに決めてしまう。それを平和教育としてやりたいのですが、少しだけ学ぶ課題の具体性に配慮し、科目の表現を社会科特殊とか、社会科総合とかっていうふうにして、科目として成立させてしまう。そこで扱う内容は、国際紛争の問題を中心とした時事問題として、私の研究しているプログラム内容を实践し、最終的に全てトータルで見た際、これは平和教育の科目であるというものに仕上げたいと思っているのです。

議論によって何が生まれるか

質問者 議論によって何が生まれるんでしょうか？

清水先生 まずですね、私は実践ありきな、と思うんですけども、実際に私は高校の教師時代にそういうことをやってたんですね。正規のやり方ではないので、ちょっと発表しづらいのですが、公民科・地理歴史科の単位を使って、生徒たちに自主的に学習させるということをこっそり試していた時期がありました。どういうことをしていたかと言いますと、明らかになってしまうと怒られちゃうと思うんですが（笑）。一人、自分の歴史上の人物や、気になるトピックを何でもいいんですけども探させる。図書館に私は一応、人物事典とか時事問題事典をそろえて置くスペースを勝手に作っておいたんですけども、仕込んでおいて、そこにあるから自分でひとつだけ取って、その一年間の授業の中でまとめて発表するってことをやってみてくれないか、と。それを評価する、と。

それは地理歴史科や公民科の成績に含むと言ったんですね。で、どうなったかということ、1年目は全員どうしていいかわからないところから始まりました。何をしたいかわからない。そりゃそうだと思います。今まで自分で何かを見つけてこれを学びたいんだということで引っ張り出してきて、とことん追究したという経験がそれまでになかったから。そのように私は見えています。だけど、それが1年2年と続きますと分かってくるんですね。

ある子なんか、ガンジーとダイアナとマザーテレサを調べて、それで履歴書を作成しました。彼女はどんなものを作ってきたかということ、個人名が入っていて、びっちり履歴書というか、本人のいろんな事柄をまとめてA3で3枚くらいに調べ上げてきたんです。とにかく彼女がまとめてきた履歴書の 카테고리に関する内容が面白くてですね。これを見た時に、「高校生にはできない」というのは嘘だなと。動機づけが自分の中でしゃかりできれば、可能性は無限である。つまりいくらでもできるんじゃないか。

ただそう確信する反面、私は今の多くの高校生は時事問題を議論するっていうのは、今の経験からだ無理だと思います。はっきりいってほとんどの高校生はできないんじゃないかな。なぜできないと思うかということ、ちゃんと理由となる資料があるのです。これは面白いんです。そう、これを見たときに「ああ、そうなんだ」と思ったんです。今の高校生の関心事を調べた機関がありまして、「NHK 放送文化研究所」が2003年に出した統計なんです。高校生に「興味あること」についてアンケートを取ったんですね。結果を紹介しますと、次の通りになります。

第16位：学校・先生のこと・・・11.6%

第15位：芸能界の動き・・・12.2%

- 第 14 位：家族・家のこと・・・12.7%
- 第 13 位：ゲーム・・・15.8%
- 第 12 位：世の中の動き・・・19.7%
- 第 11 位：健康・体・・・21.3%
- 第 10 位：漫画・・・21.5%
- 第 9 位：テレビ番組 23.2%
- 第 8 位：異性との付き合い・・・24.4%
- 第 7 位：スポーツ・・・30.3%
- 第 6 位：クラブ活動・・・32.9%
- 第 5 位：成績・受験・・・39.8%
- 第 4 位：おしゃれ・ファッション・・・45.2%
- 第 3 位：音楽・・・47.2%
- 第 2 位：将来のこと・・・57.4%
- 第 1 位：友達付き合い・・・66.9%

なぜ敢えて 16 位からお話したかという、つまり、時事問題とか、学習とか学問、これを学びたい、議論したいというのが、16 位まで出てこない。16 位という低い位置から見ても入っていないことを知っていただきたかった。で、この現実が悪いかという、私は別に悪いと思いません。このような調査に出てきたことに思春期の子どもたちが興味を持つことというのは極めて自然だと思います。

けれども、だからこそ私は、高等教育を見据えて、そこに向かう一つ前の時点で、このような生徒の興味のどこかに、少しでもいいから、平和教育という大きなくくりになるんですけども、時事問題を自分たちで議論して、学ぶことに動機付けができていくという結果が欲しいのです。つまりこのランキングの中にちょっとでも私の考える「平和教育プログラム」の影響のような、些細な要素が現れて欲しいなと思っているんですね。

司会 学ぶことの動機付けと、今のお話はあくまで先生の希望ですか？この中に入って欲しいと。

清水先生 私の希望と言われると、私の希望ですけども。

司会 今の調査結果を見て非常に危険だなと感じたんですが。つまり、友達付き合いで 66%なんですよ。そこでクローズしちゃってるんですよ。だからこそ、友達に裏切られたとかいうと、すごい落ち込んじゃって、何も周りが見えなくなっちゃうという恐ろしさがありますよね。なので、他の視点を出すとか、非常に大切だと思うんですけども。

それにしても友達だけで全て決まっちゃってるような傾向があるんじゃないかと。ちょっと話がずれますけれども。

清水先生 それは、裏返すと友達となら議論できるんです。先生と議論するのはできないんですけども、友達となら議論できる。そのことを実感したのが、大学院に在学しているときに、神奈川県のアレセイア湘南高等学校で行った研究授業の経験です。私の高校時代の恩師がこの高校で教鞭をとっておられ、無理を承知でお願いし、結果私の研究プログラムを持って行って、授業を実践させてもらったんですけども、それが予想をはるかに超えるものでした。

普段の授業では消極的な生徒達が、友達となら議論がしっかりできるんです。更に私が介在するとダメなんです。自分達でやってる限り面白い意見がいっぱい出てくるんです。つまり授業としてしっかりと成り立つ、OKなんです。だから、その光景がまさにフィンランド教育の求めているものと今重なっていて。教師というのは、明らかにアドバイスするだけで、そばについているだけでいいんです。実際に何かを主導して教授するというのは、ほとんどない授業形態です。

質問者 見学されたのはフィンランドの何年生？

清水先生 私はフィンランドに直接行ったことはないんです。フィンランドに行って研究されている都留文科大学教授の福田誠治氏に色々教えていただいたり、写真を見せていただいたり、実践をビデオなんかを見せていただいたりして、そこから学びヒントを得たんです。私は正直フィンランド教育を勉強してまだ1年くらいなので、これからもうちょっと深めていかないといけないと思っていますんですが。

質問者 フィンランドの教育がすごく効果があって、主体的にものを考えられるようになると。日本にも導入するとちゃんと物考えられるようになって教育効果も上がるんじゃないですかって話で。それって、教育方法論のノウハウの話で、別に社会以外の科目でもフィンランドの教育方法がいいですね、って話ですね。

先生の仰られた公民4科目の中でひとつだけでも時事問題をテーマにして議論するような授業にすればよいじゃないか、というのはフィンランドの教育ノウハウが優れているのであれば別に公民科に限らず全ての分野に関して導入すればいい。公民科の1個をみんなで議論しましょうよ、って学習要領に決まったとしても、その分野に時事の話がくるのか、平和教育に絡んだものがくるのかというのは期待できませんよね。今と同じ政治倫理、現代社会について議論しましょう、って教科になるだけだと思うんですけれども。

それって二つのことが混ざっているってことになりますよね。両方が達成されないとできないですよね。全ての教科に関して教師の技量によっては自由に議論させながらやってくといいですねって方法が普及したらフィンランド式の教育が広まっていくと思うんですが。やっぱり平和教育という分野は別に授業の科目に入っていないかもしれない。それでも推進しなければならない、と。

学問の使命は平和の追求

清水先生 私は平和教育ってものを、大学院の時に国際紛争を切り口にして実践してみたいと考えていたんですけれども、私の中でもそのことは少しずつ変化し発展してきます。国際紛争だけでは補いきれないものがたくさんありますし、まさに国際紛争の裏には、経済の問題であったり、もちろん文化の違いっていうのもありますし、どなたか私に「国際理解教育ってのもあるんじゃないか」とメールを頂きましたけれども、まさに国際理解という意味では、多くの分野を含んでいるというのが現実だと思います。

ただ、私は学問の使命は平和を追求することではないかと恩師の影響もありますが捉えているのです。つまり平和を作り出すのは、テクニク的なものもあるけれども、それだけではなくて、様々な要素が働かないと例えば政治や経済というものが働かないと成立し得ないものじゃないかと。火消しがまず必要で、それとあわせて火を消した後の提案も重要ではないかと。具体的に考えると、国際紛争の現場で交渉術をもってなんとかその場を抑えることは重要です。

それで根本的に平和が確立するかということそうではないし、停戦が本質的な紛争問題の解決に至るか？ということ、そうじゃないんじゃないかということ。つまり私の研究はそのようなところまで来たんですよね。

質問者 国際理解教育の質問を出したのは私なんですけれども、国際理解教育はもうちょっと具体的な教育目標とか教育委員会の守備範囲、学習活動の評価基準、何をやってどういうことを評価するかっていうのがあるわけで、その中に平和問題も入っているんですね。それはテクニクだけの話ではなくて、国際理解教育の中の価値、知識とか技能、その中には人間形成に関わる高まり、広がり、深まりも入っているわけなんです。

たぶん、国際理解教育という分野は、あまりご存知ないんじゃないかと思うんですけれども。そういう面で言ったときに、先生の今までの話だと平和問題はひとつの手段であって、自発的な学習をさせるための総合学習みたいなのを希望されているんじゃないかと。

そういう点で、カリキュラムとしてやる場合は、もうちょっと抽象的じゃなくて実施する計画があると思うんです。

例えば、特設科目と言っていましたけれども、クロスカリキュラムとか総合学習とかやり方は色々あるわけで、本当にカリキュラムとしてやる場合は、目標もそうですけれども、もうちょっと具体的に考えなくては公民科の一単位としてやるには抽象的過ぎませんか？

清水先生 とても鋭いご指摘で、国際開発教育・理解教育・開発教育というのがありませんけれどもその分野、私は専門ではないのでおっしゃるとおり、詳しくは知りません。ただ、現場にいた時に開発教育の研修とかですね、国際理解教育というのは教科を越えてうたわれていましたので、耳にはしていますし意識してきました。大きな理念というのではなくて、もうちょっと具体的な授業科目っていうところに絞って、例えば公民科に着目し、現在必修単位として確立されているこの科目が扱う内容をうまく利用すれば、現行の学習指導要領をベースにした上でほぼ私の提案するプログラムは可能なんですよ。

現実的にできるんです。できるんですけれども、たぶんこれだけでは私の考える平和教育としてという位置づけではないと思います。最終的に自分達の生活を豊かにしていくっていうところもそうだと思うんですけれども、いろんな衝突とかですね、最終的には国際紛争というものまで目を向けて考えていく議論が具体的にに取り込まれていないと私の考えるラムとしては意味がないし、このことは現行では実践されていないのが現実だと思います。つまり、できないではなく、今の枠組みで十分できるんですよ。何でできるって断言できるかといいますと、大学院を修了後実際に講師として1年現場に入った際に某公立高校で実際にやれたんです。できるんですよ。

質問者 先生の経験だけだと、たぶん皆さん納得できないと思うんですよ。

司会 残り30分を切ったのでちょっと意地悪な質問を。1点目ですけれども、先生の仰る議論の教育っていうのがフィンランドだけではなくて、私、ドイツで学んだんですけれども、ドイツでも行われていて、ドイツでは言語を主体にした教育ということでやっぱりいろんな形で議論を行って多文化教育の手法として扱われているんですよ。だから別にフィンランドに限った話ではないじゃないか、というのが1点。そこで、できれば皆さんと議論を交えてそのところを展開すれば分かりやすいんじゃないかな。

2つ目。やっぱり、今の公民科の枠では扱えないんじゃないか。特に歴史を入れなきゃいけないんじゃないか。みんなこの点で非常にもやもやしているので、できれば先生のご意

見をもう一回いただいた上で、議論を発展させたい。公民科の枠の中で自身の経験以外で何か「これはできる」「絶対ここでできる」という論拠とか、他の国の例を挙げて頂ければと思います。

“トピック学習”を实践したい

清水先生 今の話で言うと、公民科と地理歴史、科目としては別になってますけれども、じゃ、公民科で果たして歴史を扱っちゃだめか、ということそういう歯止めはないんです。制限というものは実際ありませんし。地理歴史で公民科の内容に触れちゃだめかということそういうわけでは無いんですよ。

さっき話せば広くなるねって話をしたと思うんですけども、公民科、地理歴史と分かれていること自体がちょっと問題あるんじゃないかなと思っているんです。恐らくそれは試験問題を作る時にこうした方が整理しやすいからだということもどこかにあったのではないかと思ったりして。もちろん学問的な領域のこともあるのでその点は理解しています。よって私が憶測で言ってもしょうがないのですが。

具体的に言います。現代社会の必修単位の中から1単位を国際紛争の実態、そこで生じている課題を中心に時事問題とあわせて議論するような科目を作りたい。それを社会科特講、もしくは社会科総合という名前にして単位は置き換えてトピック学習を实践したい。更に学習の発展として生徒主体でプレゼンテーションをさせるということをするればいいわけです。

実際にそれで評価するってことはありませんし、試験もありません。もちろん、誰がいい成績かということもないという授業にしたい。実際そういう科目にして1単位補って、最終的には現代社会の4単位として考える。そして気付けばその教育プログラムそが次世代の平和を考える平和教育になっている、そういう形にもっていければいいなと思っています。

そしてこれらの実現にはもちろん、教科教育法が重要となってきます。大きな教育の指針とかガイドラインというか教育目標、大きな目標ということはもちろん現状のままだでも学習指導要領にもうたわれていることで、十分フォローされていると思っていますし、さらに、先ほどご指摘いただきましたけれども、国際理解教育という長年蓄積された先行研究もありますし、開発教育としての実績というのもあるので、そのような専門的な先行研究と共存しながら、私は平和教育として公民科の1単位を国際紛争にまつわる時事問題をトピックとして議論するような科目を作りたい。

そこで扱う科目は、実はそれが具体性を示す上で今日最も重要だったところで、詳しく示せなかったのが残念ですが、先ほどの少年兵の問題、国際紛争の中で出てくるカラシニコフをはじめとした重火器の問題、徴兵制の問題、そしてもっと踏み込んで軍隊の問題、そもそも軍隊っていったい何なのか？

そういう今まで詳しく公民科では取り上げてこなかったトピックを年間を通したカリキュラムの中で実践し、教科教育法という視点で、学習スタイルとしては調査・議論・プレゼンテーションというグループ学習中心のスタイルを取る。そして学習方法と評価においてはフィンランドで実践されているような形式を導入できれば素晴らしいと私は思い、このことを私は今研究の課題としています。

質問者 確認なんですけれども、公民科というのは高校がステージですよね？例えば 4 単位というのは週に何時間？

清水先生 4 時間のことです。

質問者 1 単位というのは週 1 時間ってことですか？

清水先生 そうです。この平和教育に充てたいと。公民科の。その 1 時間というのは、繰り返しになりますが教師が何か教授するというスタイルではないものにしたいのです。

質問者 週 1 時間、通年でかつ受験科目では枠を確保し、そこで極めてヴィヴィッドな議論ができる場を設けたい、そういうことですね？

清水先生 ざっくりまとめるとそういうことです。

質問者 しかもそれは平和教育でなければならないんですね？

清水先生 もちろんそうです、ただ平和教育に関わることじゃなきゃいけないんですけど、それイコール国際的な時事問題と理解すれば、いくらでもその範囲は広がっていくでしょう。

質問者 トピックスがやっぱり年代ごとにならなくなってしまうんじゃないでしょうか？カラシニコフとか、そういう問題が。そうすると、一番最初にお話に出た、冷戦を否定することによって平和教育がなくなっちゃったことで新たな課題が生まれてきたってところがありますよね。そうすると、戦争を教えるってことではなくて、何かそれを題材にして別の目

標を置くってことにしなきゃダメなんじゃないですかね？

それぞれが議論することによって、それぞれの立場をきちんと立てる、アイデンティティを持てるようにするというような。そっちだと思うんですけども。それを現代社会の中で扱えばそれはそれでいいと思うんですけども、果たして、その枠の中で収まるんでしょうか？

清水先生 そもそもですね、1単位で世界の全部の課題をやり尽くせるという発想自体が私はおかしいと思っているんですね。分かりやすく言うと、一生学ぶものなんですよ、人っていうのは。だけど、学ぶ手法というのは、ある程度の低年齢で獲得しておかなければならないんですね。いつも思うんですけども、例えば高校の公民科の教科書や副読本ってすごく厚いんですけども、あれ全部やれっていつているわけじゃないと私は思っているんですね。

学習指導要領でもそうは載ってないので。そうじゃなくて、トピックを自分達が主体的に学ぼうとしたり考えたり、それをどう解決していったらいいんだろうというようなプロセスが学びであって、そういう学びのスタイルをそれぞれ個人が取得しようというのが目的のはずなんですね。世界の課題を全て網羅して、やり尽くそうというのが元々の目標ではないはずなんですね。

よって、取りこぼしたものがあってもいいと思いますし、時代が変わっていくことによってトピックが変わって行くのは当たり前のことです。それはその都度その都度、逆に言えば教育現場で対応していかなくちゃいけない。変化していかなくちゃいけない部分じゃないか、と。

ただ、変わっちゃいけないのは、国際紛争と関連している項目であることと、議論することを教育プログラムの教育法として現場においてちゃんと位置づけること。何度も繰り返して恐縮ですが今のような、教授するという、教える側教わる側というスタイルではなくて。そのプログラムを例えば現行の必修単位の全部にしろということ、今の日本の現状から見ると難しいとは思うので、その一部だけでももらえないかと。

質問者 やっぱ二つの話が出てくると思うんですね。今の主体的に学ぶ、モチベーションをもってやりましょうというのは全ての教科の話ですね。もう一個確実に平和教育って分野を追加で作るのだというのがありませんよね？一緒じゃありませんよね？

清水先生 そうですね。なんでそんなものを作りたいのかっていうのを理論武装するた

めには、そういう議論をするような教科が必要だと、学習スタイルが必要なんだという視点から、ターゲットを絞って持っていかなきゃならならぬのです。おっしゃるとおり、この視点はどの科目にも当てはまります。それは本当に言えば国語科でもやらなきゃいけない、理科でもやらなきゃならない。私は専門が大きく言えば社会科の教育法なので、その専門領域を中心にいわざるを得ない。自分の範疇からしか物は言えない。

質問者 もうひとつ、時々気になるのは、先生が仰ってる「今の公民科、地理歴史の中の範疇でもやろうと思えばできるんですよ、実際出来ましたし、できるんですよ」って言われちゃうと、じゃあ、それは教科があるかどうかの問題じゃなくて、現場の教師の技量の問題と、何かに囚われてないかの問題であって、解決しなきゃいけないのは、違うところにあるんじゃないでしょうか、と。

質問者 それに関連していいですか？教育が専門なわけじゃないんですが、明治学院国際学部時代に高校や中学の卒業式で日の丸と君が代を掲げて強制するのはどんなことかっていうのを研究していたんです。2004年、05年くらいに卒業したんですが、卒論終わってもたまたま新聞とか読んで今の教育現場ってどんな感じなのか見ていたんですけども、私が卒論を書いていた04年でもすごく教師の中で縛りが厳しくて教師の中ですら全然民主的になっていなくて、自分の意見を言えない、校長から言われたことしかやれない、校長は教育委員会からしか言われたことしかできない、という感じで、すごく教育現場が窮屈なものになっていた。

2006年でしたか？東京都だと職員会議でも先生達は挙手できませんよね？そういうこともあるので、清水先生が仰っているのは私立高校だから可能なのかな、という気がずっとしているんです。私は実際の教育現場を見ていないので、新聞とかで読む限りだとすごく日本の公教育が厳しくなってく感じで、現場で先生が教えたとしても生徒たちは「でも、先生達だって自分達の意見言えねえじゃん」って分かると思うんですよ。だから、公教育の現場でやったとき、すごい嘘臭ささというか、できないんじゃないかという気がするのですが。

清水先生 おっしゃるとおりですね。私は私立高校で実践していた頃に、今から思うと現在の研究の前進になるようなプロトタイプの実践を行っていました。それが研究の道に入ろうとした動機付けになっているんですけども、私は確かに出来ていたんですね。出来ていたんですけども、例えば、きちっとした枠組みの中で、こういう授業にしてくれということではなくて、私のマンパワーでやっていたんですね。それは確かに私立高校だからこそできたというのがあるかと思います。だからこそ、大学院で学んだ後現場に戻る先に公立高校を選びこだわったのです。

結果、公立高校はもうちょっと締め付けが厳しくて、「ある程度の、試験に出せるような範囲のものをまずは教授しておいてもらわなければ困る」というほかの先生方とのコンセンサスというものが確かに第一にあって、そこをちゃんと補えてかつ、という考え方なんです。つまりプラスアルファです。「それがちゃんとできたらやってもいいよ」という形で認められるレベルです。

ただ、それでも少しはできたんです。私は始めから出来る、出来るって言ったんですけども、あえてここではっきりと表現するならば、たぶん現実的には現状では私の目指す教育プログラムは実践できないんだと思います。出来るって言ったのは、システムとしてできる、やっても間違いじゃないよというレベルです。じゃ、現実的にできるか、と言われてしまうと、日本の全ての高校の現場で実践可能かということが重要ですから、現実的に今のままでは実践は難しいと思います。だからこそ、私は枠組みを作るつまり、具体的な教科を作ってしまったらいいんじゃないか、と思っています。

質問者 それは、私立でも出来ていないんじゃないんですか？出来ているというのは幻想じゃないんですか？私立だってそれを先生がやったときに成績はないって言ってますけれども、評価しているわけですよ。評価をして成績表に書いているわけですよ。それは先生の主観で評価するわけで、テストペーパーなしですよ。果たして客観的になるのかという問題も出てきますし、ちゃんとした教育だったかというのはほかの皆さんの評価を得ないと難しい問題だと思います。

清水先生 おっしゃるとおりだと思います。私一人と言ってしまったので誤解が生じちゃったかなと思うんですけども。私以外にも現場には地理歴史科・公民科の教師が何人かいましたし、もちろん教科主任もいまして、私がやっていた「総合社会科研究」という授業を作っていたんです。そこには他の教科、具体的には理科の教師や国語科の教師もいまして、それぞれ2コマづつくらいやっていたんです。

いろんな視点から教材を持ち寄って議論させるような授業をやっていて、それは全部公民科の1単位にしていたんです。その時の成績の基準っていうのは、それぞれの先生が総合的に評価していた。議論がどれだけ論理的に作られていて、説得力があったかをそれぞれが判断し、最大公約数をとって、絶対的な評価を出した上で、それをさらに通常の公民科の3単位に含めて普通の試験で出た成績と併せて公民科の成績として出していたのです。そういう何重もの評価体制でやっていたんです。

質問者 うかがっていると、今までの教育がいわゆる詰め込み方教育だとすると、1単位

は課題解決教育に向けてやりたいと。ひとつのテーマは平和でも戦争でもいいというニュアンスに聞こえるんですけども。

そういうことですかね？

トピックを理解する科目を作りたい

清水先生 今の段階では、現実的にどうしていくか、というのを考えつつあるので、そういうことになるのかもしれませんが。ただ、私がやってきた経験では、単位の読み替えでしかなかったんですけども、目標はあくまでも教科を作ってしまいたいというところにあります。そうすることで、その教科はその点数ではなくこの教科に関わる教師のコンセンサスで評価することができる。

暗記試験のプレッシャーから生徒たちを全部解放し、私語禁止というプレッシャーからも全部解放してあげて、それぞれが自分で主体的に学習の動機づけを持って何かを発言したり、トピックを理解するという科目になる可能性を秘めている。このような目的で作りたいと思っているんです。つまりこのことはやはり科目としての独立を目指さないと可能にすることはできないのではないのでしょうか。

例えば少年兵の問題をやりますよね。現行の授業でだと1時間で終わらせなきゃいけない、いや多分1時間の極一部でさらっと流れるものかもしれません。でも、こういう問題というのは一時間などで終わるテーマではありません。終わらせてはいけません。よって次の時間に絶対引き伸ばさなくてはならないですよ。それでもやっていいよ、っていう範疇がある教科を作りたいんです。ここで議論が終わらなかったよ。じゃ、次回もこれでやろうよ、っていうようなのが現実的に今はできません。

質問者 それはあくまで社会科という枠組みで？全体のカリキュラムではなく？

清水先生 現実的に考えると、公民科の枠組みで考えるしかないと思うんですけども、本当に言えば、全体を通した新しい教科作りという発想があってもいいと思うんですよ。だけど、私は教科教育法を専門にやっていて、ちょっとやそっとじゃうまくいかない、現実的に無理なんじゃないかと思っているところもある。もちろん理想は掲げなきゃいけない。だから公民科の1単位という範囲で提案し、まずはやってみたい。

質問者 生徒のアイデンティティを作るための議論なら公民科ではなくてもいいんじゃないかな、という気がしてきたんですけども。もし公民科という枠を外しちゃったらどういう展開が考えられますか？

清水先生 それを外してしまうと、私の専門外になりますし、議論が拡散してしまうので、責任持って「こうだ」と言えなくなっちゃうんですね。

司会 この場ではご自由に。

清水先生 みなさんにこの先もっと議論していただいて（笑）さらに大きく捉えると、今の教育の実態や課題にまで発展していくと思うんですけども、私はとりあえず専門分野においてこういうアプローチができるんじゃないかと。

質問者 同じようなことを勉強したんですけども、理科の先生でも、国語の先生でも、算数を教えている先生でも、似たような問題意識を持っている人は多いかも知れませんがね。そういう同志との出会いはこれまでありますか？

清水先生 たぶん、理科の先生でもいらっしゃると思いますね。仮説実験授業というのをやってらっしゃる先生を何人か知っていますけれども、それはフィンランド教育とか議論型教育と似ているんですね。最初に結果を教えなくて、予想してもらって、現実的に実験をして、結果を見て、もともと出した予想とどういうふうに整合性があったか、違っていたか、という形の教育法です。でもやっぱり、一部のコミュニティとか、やろうという先生のモチベーションの範囲であって、日本全体の理科教育を見ると、メジャーではないんじゃないかなと思います。

その理由としては公民科と一緒にだと思います。やっぱり試験・受験というハードルと、それが多くの面で学習の動機づけになっているからじゃないかなと。

質問者 先生は試験という縛りを非常に強調されますが、規制が強くなっているという面もある。ほかに何がそうさせない？ どういうふうに働いているんですか？現場で。

清水先生 家族との関係性、大きく見ると社会との関係性になると思うんですけども。日本特有の文化などもありますし、社会制度とか見方とかもありますよね。アイデンティティという話ですが、その人のアイデンティティを作る時に自分自身だけではなく、周りからどう見られているかということも関係していると思うんです。

日本において学習能力が高いという基準は、どれくらいの試験でどれくらいの点数を取っているかで見るといいんじゃないでしょうか。そういう風潮は否めないと思います。つまり根本的にはそこに行き着くんじゃないかと思うのです。その発想自体をもう一度見直し、考え直さないと出来ないことなのかなとも思います。ただ、そこにのみ執着しているとかな

か希望を見出せないし難しいので、もうちょっと現実的に引き寄せて可能な範囲で出来ないか、というふうに思っているんですね。

質問者 議論が非常に拡散しているというか、明らかに違うものを議論しているな、というような感じがしています。高校の公民科の中で、問題解決型の授業をし、様々な社会課題について社会的合意形成を図りながら問題解決をしていくことを学ぶというのは、公民という学問の身に付けるべき技能として非常に大切なことだというのは分かります。ただ、中等教育の中で、極めて複雑な問題が絡み合っていて周辺知識がない状態で議論すると、ややもすると危険な、おっしゃるような平和教育という議論をテーマとして扱うことってというのはまた別の議論であって、そこはちょっと慎重に扱うべきなのではないかと思えますね。

例えば先ほどの少年兵の問題だとか、私も伊勢崎さんがいた時の授業を取っていたので分かります。伊勢崎さんがやっていることは、本当に素晴らしいことだと思いますよ。そこに惚れたっていうのも分かるんですけども、このような議論が高校の職員室に持って行ってできるのかというところとはちょっと違うと思う。

つまりお互いの知識レベルが一定水準以上のところで揃っていなければ、議論が出来ないんですよ。そういう部分のきちんと蓄積があった上で、例えば初等教育の段階から平和教育がひとつのテーマとして上がってきていて、高校の段階でそういうことをやろうよっていう議論は分かりますけれども、いきなり高校の公民科の中で4単位のうちの1単位を平和教育っていう形で少年兵の話だとか極めてトピカルな狭い話をしようというのは、無理があるんじゃないかなと思うんですね。

大きな目標は“教育政策”への発展

清水先生 確かにその通りで、そういうふうにおっしゃる方が結構多いです。大体反論されるのは、そこですね。高校生の段階でこのようなトピックを扱っても、本質的な議論、ちゃんとした議論が出来ないんじゃないかと。やっぱり初等教育、中等教育ではまずは基本的な学習を積上げて行って、そこを目標としないとだめじゃないかと。そうしないと、間違った方向に議論がいつてしまうんじゃないかというご指摘です。このような指摘は本当に多く受けますね。

ただ、だからやらないほうが良い、やめたほうが良い、現実的に無理じゃないかということにはならないのではないかと。私はその疑問と謎を解きたくて現場に実践研究のため何度も入っているんですけども、できるんですよ。思っているよりちゃんと正確に。本質

を捉えて議論できているんです。私はそれをどう評価しているかというと、戦後実践してきた今までの平和教育というものが、見えないところで浸透し大きな成果をあげていることにある、と考えています。

つまりしっかりと平和を議論できる基盤を生徒は知らないうちに獲得しているのではないか。つまり、平和というものは日本の子どもたちの中では、ある種空気のような存在になっていて、「平和ボケ」って言葉で表現されるんですけども、ボケているということは、イコール平和にどっぷり浸かっていて、平和的感覚をすでに享受している、平和のよさを認識しているということにもつながっているんだと思うんです。

少年兵の問題を持って行って議論させても、大学生と一緒に議論するのとはほぼ変わらないような、いやそれ以上のもっと面白い発想が出てきたり、信じられないような解決策が出てきたりするのです。たぶんそれは大学生より高校生、高校生より中学生、中学生より小学生のほうが感性が豊かだからではないでしょうか。ただ、このことを証明するには、現場からの生徒の声を一つでも多く拾い上げて、事実としてできるんだってことを積上げていかないと納得していただけないものではないでしょうか。だからこそ、私はこの研究と実践をやり続けなきゃいけないと思うんです。少なくとも大学で私の教育法を学んでくれた教え子には、必ず「教育実習に行ったらひとつでいいのでトピック学習・グループ学習をやってくれ」と強く指導します。

そして、実践したらちゃんと議論できたか現状を報告してほしいと言っているんですけども、実際に教育実習で実践した学生からの報告では、議論が出来ているようです。それなりに時事問題をしっかり理解して「国際紛争の問題とかも、本質的な議論をし、それなりにしっかりと考えてくれた」という話を受けています。

最後に、私の目指す大きな目標としては、近い将来、初等教育・中等教育・高等教育という学校教育全体で捉え、ひとつの大きな教育政策というレベルで議論ができるようなところまで発展していけばと思っています。